

## 「みんなのための映画祭」：第4回リヨン映画祭レポート

宮尾 大輔

町中にロバート・ミッチャムがいる！「LOVE」と刺青された右手の指を見せながら。リュミエール兄弟がシネマトグラフを発明したリヨンだから、映画の街だと知ってはいたが、これにはびっくりした。リヨン第3大学での1年間のリサーチのため、リヨンのパール・デュエ駅に列車で到着したのが9月の始め。到着した駅の構内をはじめ、地下鉄の駅のホーム、路面電車の停留所、バスの車体、ビルボード、ショッピング・センターや商店街のショーウィンドー、観光案内所、その他町中のあらゆるところに1940-50年代のハリウッド犯罪映画の代表的なスター、ミッチャムがいたのだ。

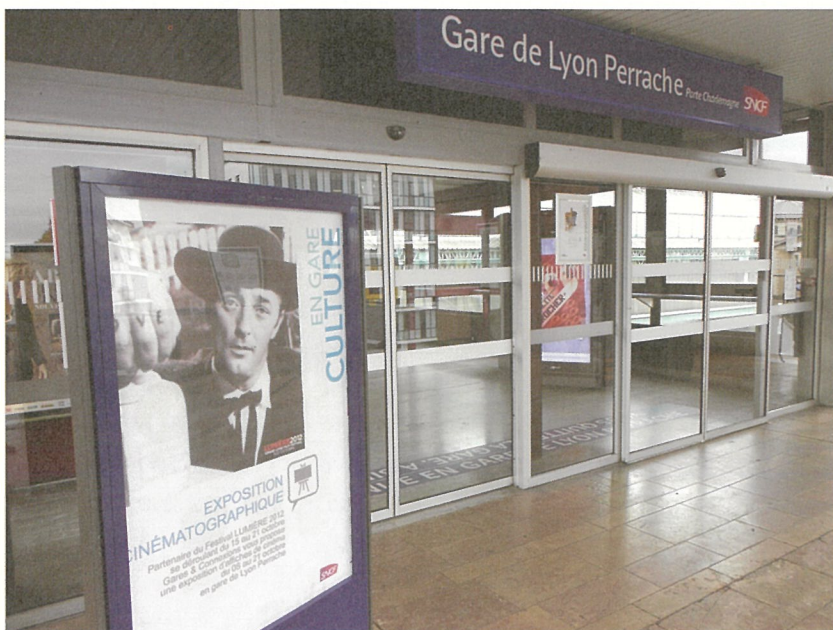
もちろん、本人がいたわけではない。映画『狩人の夜』(1955年)でミッチャムが演じた偽牧師の大きな写真がいたるところに貼られていただけなのだ。が、このカルト・フィルム・ノワールで街をいっぱいにするなんて、なんてここは素敵なおとこなんだ、映画の街だというのは本当だったんだ、と心の中で叫ばずにはいられなかったのである。

これがリヨン映画祭(Lumière 2012 Grand Lyon Film Festival)のポスターだとわかったのは、少し冷静になってそのポスターを見つめ直してからのこと。リヨンでの生活が軌道に乗り始めてくると、ポスターはミッチャム版以外に、英国の映画監督のケン・ローチ版があることもわかってきた。そして10月15日のオープニングが近づき、上映プログラムが発表になると、今度は映画祭に対して懐疑的になってきた。あまりにも雑多なプログラムで、テーマも、方向性も感じられなかったからだ。例えば、オープニング上映が、アル・パチーノ主演のアメリカン・ニュー・シネマ『スケアクロウ』(1973年)、特別表彰のため招待されているのがケン・

ローチ、回顧上映シリーズは、ネオリアリズムのヴィットリオ・デ・シーカ監督、ヌーヴェルヴァーグのアニメス・ヴァルダ監督、ロシアのアンドレイ・コンチャロフスキー監督、一般的にはほとんど知られていないハリウッドのチャールズ・ブラビン監督、それに大スター、ディーン・マーティン。サイレント映画『パンドラの箱』(1929年)のオーケストラ付き上映があるかと思えば、市で一番の大ホール(先々週はスティングがコンサートを行った)での『E.T.』(1982年)の上映は、「子供向け！」と大きく宣伝されている。それに加えて、若山富三郎主演『子連れ狼』シリーズが一挙に上映されたりもする。ポスターになった『狩人の夜』の修復版上映も目玉の一つとされている。修復版と言え、ロマン・ポランスキーの『テス』(1979年)や、ジャン・ルノワール監督の『ゲームの規則』(1939年)と『黄金の馬車』(1952年)もある。その上、ゲストとしてやってくるスターが、70年代に特に人気だった美人女優ジャクリーン・ビセットに、名優マックス・フォン・シドーに、タランティーノ映画で有名になったティム・ロス？ 一体どういう映画祭なんだ？ あまりに支離滅裂ではないか？

が、実際に映画祭が始まってみると、冷めた気分はどこへいったのか、逆に何か幸せな気持ちになって、毎日を楽しんでいる自分に気がついた。そして、何か幸せそうな顔をしているのは、どうも僕だけではなさそうなのだ。この幸福感は、早朝から真夜中まで、ぶっ通しでサイレント映画を観続ける、まるで修道僧になったかのようなイタリアのボルデノーネ映画祭での達成感や、話題の新作を大きな会場で見、監督のトークを聞いて、『ニューヨーク・タイムズ』紙の批評をリアル・タイムで読んでという、まるで第一線で活躍するジャーナリスト

リヨン国鉄駅に貼られた、  
映画祭のポスター



になったかのようなニューヨーク映画祭での高揚感、あるいは、世間から少し隔離した場所で、映画製作者と観客とが語り合うことで生まれるロバート・フラハティ映画祭での一体感などは、明らかに違うものだ。この気持ち、どこからくるのだろうか？

この映画祭で最初に僕が観た映画は、マックス・オフルス監督の犯罪メロドラマ『無謀な瞬間』(1948年)だった。平日火曜の午後だし、修復版というわけでもないし、ゲストも来ないようだし、同じ時間に他の会場でもいろいろ映画を上映しているし、まあ、クラシック映画好きの年配の人たちとシネフィルとが集まるくらいだろうと高をくくっていたのだが、これが大間違い。開演20分前の時点で、小さくはない劇場はほぼ満席。そしてもっと驚いたのは、上映5分前くらいに2~30人の高校生の集団が、そろそろと劇場に入って来たことだ。関係者のために用意されているのだとばかり思っていた予約席は、高校生の課外授業(?)のために確保されていたのだ。これ以降も、僕が観に行った映画は朝でも、昼でも、夜でも、毎回満員か、ほぼそれに近かったし、また、朝昼の上映には必ず高校生が団体で出席していた。彼らは皆、『無謀な瞬間』のような古い映画に特に退屈しているようでもなく、コミカルな場面では笑い声を上げ、『リトル・オデッサ』(1994年)のティム・ロスとモイラ・ケリーのセックス・

シーンでは、照れ隠しのためか、歓声を上げていた。

全ての映画がソールド・アウトに近かったのは、チケットが格段に安いことが大きな理由の一つだろう(普段は10.5ユーロのところ、映画祭のチケットは映画1本観るのに6ユーロ。約600円だ。特別会員になると、更に1ユーロ割引になって、しかも15ユーロする映画祭カタログが付いてくる)。高校生が観に来ているのは、リヨン市が映画祭を教育と文化政策の一環と見なしていることの表れだろう。付け加えるなら、全ての上映前には、批評家による映画の紹介があるのだが、これが必ず撮影されている。照明からカメラ、そして録音まで担当しているのも、主に大学生、高校生くらいの年齢に見える若い人たち。おそらく職業訓練の場所を、映画祭が提供しているのだろう。

ここで思い当たったのが、映画祭のキャッチ・フレーズ「みんなのための映画祭 (un festival de cinéma pour tous)」だ。この言葉には、主催しているリヨン市、ローヌ・アルプ郡、そしてフランス文化庁の、映画を使った町おこし、国おこし、という政治、経済的思惑が当然絡んで来ているだろう。それに、「みんなのため」の「みんな」という言葉には注意が必要ではあるだろう。本当の一人残らずというのは、ほぼ不可能なのだから、この「みんな」は、あくまでも主催者側の考える「みんな」だからだ。そこから漏れたり、排除されたりしている人も

いるからだ。

それでも、この映画祭に僕が幸福感を感じたのは、マニアとか業界向けの「映画」だけでなく、多くの人が参加できる「祭」の部分にも重点が置かれているからだと思う。

映画祭を実際に運営しているのは、リュミエール兄弟が『工場の出口』(1895年)を撮影した場所に本拠を置くリュミエール映画研究所。ここの映画館が映画祭のメインの上映施設となる。研究所の庭には期間限定の「映画村」が作られ、6ユーロどころか、無料の映画上映も毎日行われる。映画村には臨時のラジオ局も設立され、監督やスターのインタビューなども観客の目の前で行われる。なので、まったくお金を使わなくても、何本もの映画を観て、監督やスターを目の当たりにすることもできるのだ。

上映プログラムも、何でもありと言えばそれまでだが、それぞれの観客の好みや知識に応じて、様々な時代、国籍、ジャンル、監督、スターの作品を観ることができるようになっている。すでに述べた以外にも、音楽映画オールナイト上映なんて企画もあり、『ハード・デイズ・ナイト』(1964年)、『アメリカン・グラフィティ』(1973年)、『スパイナル・タップ』(1984年)、『ウォーク・ザ・ライン』(2005年)と観て行くと、英米の戦後ポップ・ミュージックの歴史も一緒に振り返ってしまう。

新旧のドキュメンタリーも充実していて、第2次世界大戦中の対独レジスタンス(リヨンが本拠地だった)の英雄ジャン・ムーラン(リヨン第3大学には彼の名前が付けられている)についての映画があったり、普段は入れない市庁舎の建物で、リヨンの歴史をニュース/ドキュメンタリー映像で振り返るという企画もあったりして、「町おこし」の側面もはっきりと見て取れた。

また、リヨンで同時期に開催されていた別のイベント、第15回ダンス・ピエンナーレとの協賛で、映画舞踏会という、映画を眼だけでなく、身体でも楽しもうという画期的な企画もあった。市内の舞踏会場で、ヴィスコンティの『山猫』(1863年)などの映画のダンス・シーンを次々に上映し、それに合わせて観客も踊ってしまうというものだ。

映画研究者でシネフィルである僕が一番楽しんだのは、マックス・オフルス回顧上映シリーズ。ビデオになっていない1930年代の作品、*Die verkaufte Braut*

(1932年ドイツ)、*Comédie de Largent* (1936年オランダ)*La Tendre ennemie* (1936年フランス)などの作品群を初めて観ることができて、オフルスが自分が望んだわけではなかったかもしれないが、いかにトランスナショナルな映画監督だったかを実感することができた。そして、映画というメディアの視・聴覚性(カメラと音)、虚構性(演劇)、物質性(回転するフィルム)に、オフルスがいかにセンシティブだったかを、改めて認識することができた。

また、映画祭はリヨン市内に限定されているわけではなく、ほとんどの映画が近郊の町でも上映され、アクセスの面でも「みんなのため」が実行されていた。そうした上映には、近郊の町の映画館の中でも1、2を争うような広さの劇場が用意され、そこが満員。映画祭最終日にギャング映画の大作『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』(1984年)が上映された郊外映画館のスクリーンは、アイマックスよりも巨大なものだった。

上映プログラムの考え抜かれた多様性。料金も含めたアクセスの良さ。「町おこし」としての政治的経済的役割。高校生・大学生の教育と職業訓練。そして修復版の上映は映画会社のDVD発売に先立つ宣伝となる。更に、映画研究所の向かいの映画学校の建物では、映画と写真に関連した蚤の市が開かれ、カメラ、フィルムからポスター、ビデオ、書籍に至るまで、業者、専門家、コレクターが集まり、映画の現状についての情報交換の場となっていた。

2009年に第1回リヨン映画祭が開催された際の告知には、映画が始まった街で、映画の歴史への愛情溢れる映画祭が始まります、と記されている。今回のポスターで強調されていたのも、ミッチャムの指に刺青された「LOVE」だった。『狩人の夜』の中で、ミッチャム演じる偽牧師は、そのもう一方手の指に刺青された「HATE」と「LOVE」とを組み合わせ、「世界は絶えずこの二つが戦っている」と説教する。かなりナイーブな言い方になるが、リヨン映画祭は、あえて「LOVE」を強調し、「みんなのための」祝祭空間を作り上げることに成功している。リヨン映画祭は、文字通り映画の「祭」となっているのだ。祭だからこそ、1週間というほんの短い期間だけれど。